

研究結果報告書

研究結果

本研究は、来船画人の一人として知られる孟涵九（1756～？）と彼が残した書画作品を研究対象とする。漢文的教養を中心とする近世以来の日中両国間の文化交流の歴史の中で、孟は、日本語に精通し、且つ和歌の創作に携わった中国文人として、極めて異色の存在であったと言わざるを得ない。一塊の中国文人をして、従来無視されて来た日本文化の中にある「和」の部分に、かくも深くのめり込ませたのは、何だったのであろうか。本研究の目的は、孟涵九の現存作品を悉皆調査することにより、彼の日本語受容および和歌創作に関わる諸々の事実を明らかにするとともに、江戸後期の日中文化交流の特質を改めて考察することである。

本研究のための調査は、主として次の三つの面から実施した。第一には、明末以降の中国社会において、日本語と日本文学が如何に受容されていったのか、その時代背景を究明すること。第二には、孟涵九に関する文献記録（孟の画像、渡航記録、日本人との筆談記録、唐船船頭としての活動など）を収集し、その人物像を浮き彫りにすること。第三には、孟の現存作品に対する悉皆調査と解説により、彼の文化的実践の全容を明らかにすること。

上述の問題を念頭に置き、2012年5月以降、数回に亘って調査を実施した。文献資料の調査は、中国国内の図書館（国家図書館、上海市図書館、浙江省図書館、浙江省平湖市図書館など）、台湾中央研究院所属の図書館（近代史研究所図書館、歴史語言研究所図書館）、国際日本文化研究センター（京都市）および長崎歴史文化博物館図書室等で行った。そして孟涵九の現存作品に対する調査では、長崎歴史文化博物館と東京渋谷区松濤美術館にある橋本末吉コレクションばかりでなく、孟涵九の作品を現在所有する民間のコレクターからも、多くのデータと様々な有益な情報を入手することが出来た。

従来、孟涵九の作品は、来船画人の展覧会/展示会が企画された時に、時々展示される程度であった。また「孟涵九」本人に関する人物研究も、皆無に近かったと言わざるを得なかった。本研究の最大の成果は、何といたっても各地に点在して残っている孟涵九の作品を網羅的に調査することにより、その全体像を浮き彫りにし、更には、孟涵九本人の人物像をも、かなり具体的に浮き彫りしたことであろう。また、日本語による和歌の創作という孟涵九の文化的実践を研究したことによって、日中文化交流の新たな境地を開いたのではないかと密かに自負するものである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

- ① 唐権 「倭語の戯 曹寅『日本燈詞』について」
2012年7月27日 台北市南港中央研究院近代史研究所公開講演
- ② 唐権 「来舶清人の和文学創作について 孟涵九を中心に」
長崎大学第八回海港都市国際シンポジウム「東アジア交流圏の構想と海港都市の経験」
及び国際ワークショップ「近代東アジアの境界文化と長崎」、2012年12月15日
於長崎大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

唐権 「唐土の歌人 孟涵九とその時代」
国際日本文化研究センター編『日本研究』に投稿予定。

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)